

機関番号：34504  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20530446  
 研究課題名（和文） 可視化されたエスニシティの比較研究：在日コリアン・コミュニティの過去と現在  
 研究課題名（英文） An Attempt of Visualized Fieldwork: Production of Visual Documentaries of the “Korea Town” in Ikuno, Osaka  
 研究代表者  
 山中 速人（YAMANAKA HAYATO）  
 関西学院大学・総合政策学部・教授  
 研究者番号：80191360

研究成果の概要（和文）：同地域の同方法による映像記録は、1990年に実施されている。2008～2010年の間、同方法で経年的に同地域を撮影した映像を90年の映像と比較することによって、地域の表象の変化を明らかにし、それを日本社会における在日コリアン集住地域の歴史的変容の中に位置づけた。今回の撮影では、ハイビジョンビデオカメラを使用し、記録媒体はDVDを使用した。

研究成果の概要（英文）：This research first provides an overview of the production of visual documentaries of the “Korea Town” in Ikuno, Osaka, in which a camera stabilizer (*Steadicam*) was used to make visual and digital documents of the neighborhood in field research. Some challenges and questions facing sociological researches using visual media are discussed.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：社会学、社会調査、映像民族誌、エスニック・コミュニティ、在日コリアン

## 1. 研究開始当初の背景

最近のエスニック・コミュニティの特徴の1つは、コミュニティを構成する多様なエスニック集団にかかわる文化表象が、可視化の傾向を示すようになったことである。この現象の背景には、旧住民である在日コリアンや華人たちの間で高まりつつある出

身エスニック文化への自己覚知、新来住者たちの定着化の進展、そして、日本社会からのそれらエスニック文化に対する関心の高まりなどがあるだろう。近年は、これらの可視化されたエスニックな文化要素を1つの観光資源として位置づけ、街おこしなどの地域振興につなげようとする官民一体

の試みも行われ、エスニシティの可視化傾向はさらに加速しているようにみえる。

都市におけるこのようなエスニシティの可視性の拡大は、街頭空間においてどのような具体的な表象の変化を伴い、また、個々の表象を超えて地域社会全体に共有される何らかの特徴を持っているのか。また、それらは、個々のエスニック集団のアイデンティティ形成と変容にどのような影響を及ぼすのか。さらに、可視化された文化要素がエスニック文化の構築にどのように関与するのか。

このような問題意識にもとづいて、可視化するエスニック・コミュニティを映像によって記録することを試みた。

## 2. 研究の目的

大阪生野区にある「コリアタウン」を映像によって記録した。記録の方法は、防振ステディカムに装着したビデオカメラをつかって地域社会の街頭景観をシームレスに連続撮影するという特殊な方法であった。

この方法をもちいた同じ地域の映像記録は、1990年にすでに一度撮影されている。この過去（1990年）に撮影された映像記録と同じ手法によって、同じ地域を同じ時期に撮影することによって、得られた現在の映像データを90年の映像データと比較することによって、地域社会の表象の変化とその方向を明らかにし、その変化を、この16年間の日本社会における在日コリアン社会の歴史的な変容、さらに、在日外国人を取り巻く変化の中に位置づけることを試みた。

ただし、今回の研究では、撮影にはハイビジョンビデオカメラを使用し、記録媒体はDVDを使用した。

## 3. 研究の方法

先行する試みは、1990年に行われた。記録の方法は、防振ステディカムシステムを使用し、周辺地域6キロメートルにわたる周辺街路を、路地にいたるまで、切れ目の

ないシームレスな動画映像として撮影するものだった。2008年秋～2010年にかけては、1990年の先行研究をベースに、同じ地域を対象とし、同じ方法で撮影を行った。

まず、防振ステディカムにハイビジョンビデオカメラを装着し、対象地域の街路を東から西へ切れ目なく連続移動で撮影した。カメラは、進行方向に向かって左側（街路南側）と、進行方向に向かって右側（街路北側）の2方向の撮影を行った。また、それとは別に、御幸森神社西端からコリアタウンを西から東へと移動し、平野川橋の東詰で180度反転し、コリアタウンの東端から同タウンに進入し、一条通を左折（南折れ）し、御幸森小学校前を右折（西折れ）し、ふたたびコリアタウンにもどったところで、御幸森神社方向に左折（東折れ）し、出発点に戻るコースの全行程を、進行方向にカメラを向け、シームレスに撮影した。映像には、生活景観と生活音をふんだんに含んだ雑踏社会が撮影された。撮影された映像の比較研究が行われた。

## 4. 研究成果

収録されたデジタル映像を大容量ハードディスクに動画データとして保存し、それをコンピュータで制御することによって、街路の地図上の位置に応じて、それに対応する街路映像が取り出せるデジタル映像データベースの構築を試みた。このデータベースについては、すでに、1993年の文部省科研費試験研究の助成を得て、その基本部分は完成しているため、それを部分修正し再利用する予定であった。しかし、使用したコンピュータ（マッキントシュ）のOSが当時のものとまったく互換性を失っていたため、過去のシステムを利用できず、データベースの構築は、開発の継続を行う予定であるが未完の状態にある。

したがって、90年撮影の映像と、今回撮影した映像の比較分析は、もっぱら複数のコンピュータを人的に操作することによって、実施された。比較項目は、エスニッ

ク表象の分類、出現量、新たに出現したエスニック表象、消滅したエスニック表象などである。分析に際しては、大阪府立大学人間社会学部准教授・秋庭裕氏、府立桃谷高校韓国語教諭・チョンヤンイ氏、在日朝鮮人評論家・シン・スゴ氏の3名の協力を得た。主な分析結果は、以下のとおりである。

1990年の映像にくらべて、今回の映像では、コリア文化をしめす指標記号（インデックス）が全体として増加している。たとえば、商店街の出入り口に百済門が設営され、案内板には道祖神、いくつかの商店の店頭には、済州島の民俗である石像などが配置されている。これらのインデックスが示すように、この20有余年間に、あきらかにコリアタウンは視覚的なレベルでエスニック化の傾向を強めた。

(1) コリア料理の食材や民族衣料などを販売する店の数は、ゆるやかに増加している。ただ、その店頭の商品陳列などを観察すると、90年の映像では、キムチやコチジャン、乾燥わらびなどコリア食文化を代表する商品には、商品名がつけられていない場合が多く、また、商店の名前も日本式の屋号を持つものが多い。これに対し、今回の映像では、キムチ、コチジャン、ナムルなど、商品名の明示がされている場合が多く、また、店頭の広告にも、ハングルで表示されたものやコリアンの店であることを明示した店舗が増えていた。この事実は、コリアタウンが、在日コリアンの生活物資を提供する商店街の性格より、コリアンの文化をもとめて訪れる日本人観光客を顧客とする傾向が強まっていることを示している。観光化の傾向がこの17年間に強化されたといえる。

(2) 店舗の中には、韓国から輸入された食材やインスタント食品、韓国映画やテレビドラマに関連するキャラクター商品などを販売する店舗が加わった。それにくらべて、地元あるいは日本で製造された食材や物品を販売する店舗は微減の傾向にあった。

この事実は、コリアタウンにおけるニューカマーの増加を反映しているものと思われる。と同時に、コリアタウンが現代の韓国文化をより強く反映する傾向をもつように変化していると思われる。

(3) 1990年ではコリアタウン内に混在していた非コリアン商店の数に大きな変化はなかった。しかし、全体としてコリア文化の視覚化が拡大したため、街全体としては、コリア文化へのモノトーン化が進行したような印象をあたえている。

このような知見は、映像の比較分析だけではなく、地元の商業者の口述の記録や研究者による調査研究などによっても、裏付けられるところである。

都市地理学の視点から同商店街の再開発の過程を調査した上田智也は、行政、日本人商工団体、在日コリアンの地元商店主の利害がダイナミックに調整されながら、コリアン文化を強調した街づくりへと結実していく過程を分析している。

また、同商店街で食品卸販売店を営む洪呂杓は、自身の口述による個人史『コリアタウンに生きる』の中で、同様の指摘をしている。それを要約すると、80年代の末、商店街の若い人々が集まって、商店街の活性化策として、コリアンとしてのエスニックな特徴を打ち出して、商店街の改修を行おうという案が持ち上がった。紆余曲折を経た後、最終的に、東と中央の二つの商店会が一体となり、「コリアタウン」として再出発することになった。改修にあたっては、地方自治体の助成金を申請し、コリアタウンらしい百済門やカラー舗装など、コリア文化にちなんだエスニックな景観の演出にも、気配りすることになった。また、「たくさんの日本の人たちを受け入れよう」という空気にはなりつつあると延べ、映像分析でも認められた同地域の観光化の方向が、商店街によって、意図的、政策的に選択されたものであったことを裏付けている。そして、この事実は、今日のエスニシティの形が観光というモードに促されて

生起する可視化現象と深く関連づけられているという R.E. ウッドの指摘を裏付けるものであると言えよう。

映像によって読み取られた「情報」は、このようにフィールドワークやライフヒストリーなどの他の研究アプローチによって、裏付けられることで、より確度の高い「事実」としての評価を与えられていくことになる。本来、映像から読み取る「情報」とは、視覚化された変化、兆候、出来事の痕跡、仮説を提供してくれるヒント、出来事の意味を直感させるイメージなどとしての性格を抜きがたく持っている。しかし、それは、同時に、そのとき限りの例外であったり、事実の誤認であったり、また、操作者によって仕組まれた罫であったりする可能性を排除できない。したがって、映像から読み取られた「情報」は、聞き取り調査や統計調査による裏付けがなされなければならないということになる。

今後の展望と課題は次のようなものである。

まず、エスニック・コミュニティに関するこのような包括的な映像記録は他に類例がなく、貴重である。と同時に、それをめざましく発展する新しい映像メディア技術によって時系列的な記録をとり続けることの学術的、社会的意義はきわめて大きいと思われる。たとえば、社会学、社会人類学、文化人類学、民俗学、都市計画論、社会調査法などの分野において、教育および学術研究の両面にわたる映像資料として、ひろく活用されることが想定されよう。今後は、ひきつづき同地域の映像による記録を経年的に行いたいと考えている。また、他の地域や対象についても、この記録方法での映像記録を行い、その優位性を確立していきたいと考えている。

## 5. 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 山中速人、コリアタウン（大阪市生野区）の映像記録の方法と実際—防振ステディカムを使用した映像フィールドワークの試み—、日本都市社会学年報、査読有、29、2011、編集過程
- ② 山中速人、社会調査におけるマルチメディア利用の実践と展望：フィールドワークにおける映像データの取り扱いをめぐって、社会学評論、査読有、60(1)、2009、25-39

[学会発表] (計 1 件)

- ① 山中速人、大阪生野コリアタウンの映像記録の方法と実際—映像フィールドワークのこころみ、第 28 回日本都市社会学大会、2010 年 9 月 12 日、日本大学文理学部

[図書] (計 1 件)

- ① 山中速人、七つ森書館、映像フィールドワークの発想—ビデオカメラで考えよう、2009、190

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山中 速人 (YAMANAKA HAYATO)  
関西学院大学・総合政策学部・教授  
研究者番号：80191360

### (3) 連携研究者

大森 康宏 (OMORI YASUHIRO)  
立命館大学・映像学部・教授  
研究者番号：00111089